



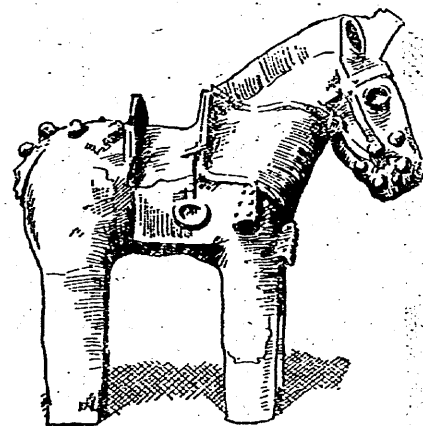
K160.3

1

3a

大むかしの人々





もくじ

一、まえがき.....三

二、大むかしの人々.....一四

三、私たちのそせんはどんな生活をしていたか.....六六

―日本の大むかしの人々―





ま え が き

森のなかで道にまよった少年

明くんは、森へあそびにいつて、どうどう道にまよつてしまいました。なん時間もなん時間も、木のあいだをまよいあるさましたが、どうしても道をみつけることができませんでした。一けんの家もみつきりません。あつちへ走ったり、こつちへ走ったりして、大きな声でたすけをよびましたが、だれもこたえてくれるものがありません。

しかし、明くんはゆうかなな少年でした。なきたくなるのをじつとがまんして、歩きまわりました。おなががすくと、木の



みや草のみをとってたべました。
のどがかわくと、いずみのふち
できれいな水をすくってのみま
した。

森のなかには、手でつかまえることのできる小さな動物もいました。また、明くんひとりでは、とても手におえない大きなこわい動物もみかけました。そんな動物をみると、どうしてみをまもつたらよいだろうかと、考えずにはいられませんでした。

また川では、つりの道具やあみがあつたらとることのできそうな魚も、およいでいるのをみました。

けれども、そのうちに、だんだん太陽がひくくなって、森のなかには、しだいに寒くなってきました。そして暗くは、おうちのこと、あたたかいおへやのこと、おかあさんのつくつてくださったおいしいごちそうのこと、などを思い出しました。

ある大きな木のところへきたとき、明くんはその木に、からだがつくりはいるほどの大きなあなのあいているのをみつけました。明くんはそのなかへはいって、じつとよこになりました。あたりはもううすぐらく、なんの音もきこえてきませんでした。あまり歩きまわったので、すっかりつかれていました。それに、おなかもすいていました。だれがいったい、明くんをさが

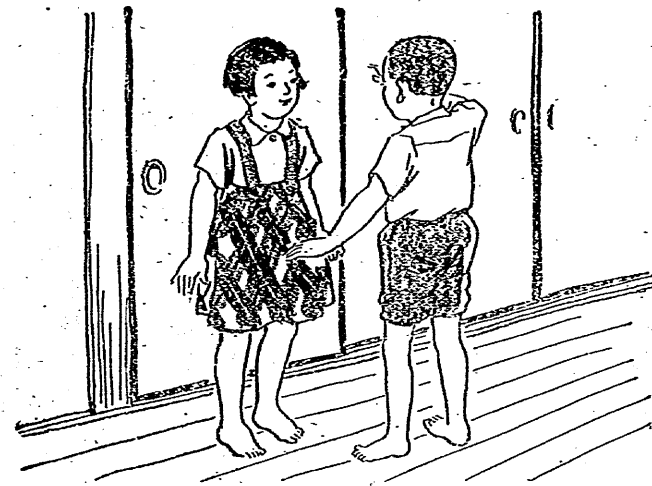
しだしてくるのてしうか。
もし、だれもみつけだしてくれ
なかつたしたら、明くんはあ
すから、ひとりて、たべものを
さがし、ねる場所をつくつて、
生きていかなければなりません。
しかし、なん時間かたつたと
き、そとで大きなさけび声がし
ました。あかりがうごいている
のもみえます。みんなが心配し
てさがしにきてくれたのでした。
明くんは思わず大声をあげて、



ちちゅうであかりの方へ走りだしました。そして、なつかしい
お父さんの手に、しっかりとつかまることができたのでした。
うちに帰って、やっとおちついたとき、明くんは、森のなか
であつたいろいろのことを、みんなに話しました。すると、お
とうさんは、一さつの本をだして、「あしたでもよんでごらん。」
とおっしゃいました。それは、むかしの人々のことをかいた本
でした。

あくる日、学校から帰って、その本のいちばんはじめにある
大むかしの人々のお話をよんでいるとき、明くんはこんなこと
を考えました。

「もし、ぼくが森のなかで、だれにもさがしだされなかつたら、
きつと大むかしの人々とおなじようにくらさなければならな



ったんだ。だけど、ぼくは、大
むかしの人のようにうまくやっ
ていけたかしら。」

もしあなただつたら、明くん
のようなめにあつたとき、いつ
たいどん、なことをするでしょう。
そのとき、ちょうど、みちこ
さんがあそびにきました。明く
んは、森のなかで道にまよつた
ことを話しました。すると、み
ちこさんはいいました。

「私なら、きつと、木を切つて

自分の家をつくるわ。そして、動物をつかまえておりようりするわ。そうそう、それに火をおこしておけば、あたたかいし、だれかがきつと火をみつけて、たすけにきてくれると思うわ。」

明くんはこたえました。

「でも、もしおのがなかつたらどうするの。それに動物は人間よりはやいんだから、鉄ぼうやナイフがなかつたら、つかまえることも、りようりすることもできない。火をおこそうとしても、マッチがなかつたら、だめじゃないか。」

そして、明くんはみちこさんに、大むかしの人々のことをかいてあるところをみせながらいいました。

「大むかしの人は、ぼくたちよりも、もつともつとふべんで、ひどいくらしをしていたんだ。」



あなたがたは、ロビンソン・クルーソーの話を
きいたことがありますか。海のはなれ小島で、
ひとりでくらしていかなければならなかったクルー
ソーの生活は、どんなだったでしょうか。

へんふべんなぐらしをしていました。そのころには、人々は、
家というものをみたことがありませんでした。歩くのにつごう
のよい道もありませんでした。人々はまた、きものもみたこと

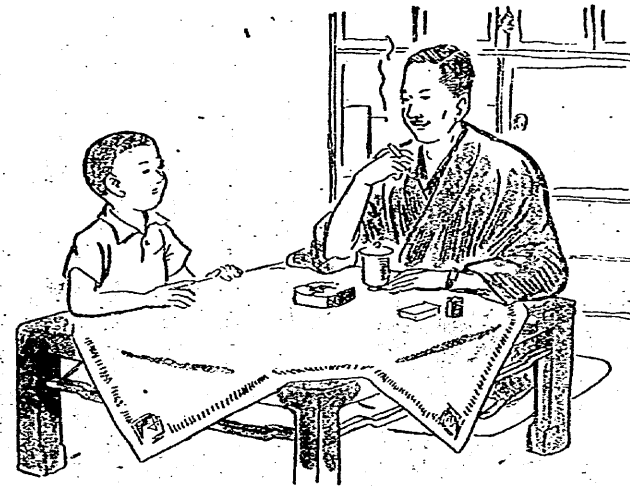
そこでふたりは、大むか
しの人々のことについて、
いつしうけんめいに考え
はじめました。いつたい、
ふたりはどんなことを考え
たのでしょうか。つぎに、
ふたりの考えたことを、か
んたんにかいてみます。
「大むかしの人々は、たい

がありませんでした。火を使うことも知りませんでした。べん
りな道具なども、なにひとつそろっていませんでした。そんな
ありさまでしたから、寒さをふせいだり、たべものを手にいれ
たりすることも、たいへんむずかし
いことでした。きつと、私たちには
考えられないほど、ふべんな生活だ
ったでしょう。

夕ごはんのとき、明くんは、おと
うさんに、みちこさんとふたりで考
えたことをお話ししました。

おとうさんはにこにこわらいなが
ら、「よく考えたね。このへやをみて





ざらん。私たちはいろんな道具
 をたくさん使っている。いつた
 いこんな道具をつくることを、
 だれが考えたのだろうか。い
 すでも、つくえでも、みんなそ
 うだ。これはみんな、むかしの
 入たちが考えてくれたものだ。
 明が考えた大むかしの人々の生
 活とくらべると、私たちはたい
 へんべんりな世の中にくらして
 いる。しかし、こんなべんりな
 世の中をつくりだしてくれたの

は、いったいどんな人たちの力だったのだろうか、明にわかる
 かい。それは、大むかしから今までの、たくさんのおうぐれした人
 たちの力なんだ。そして、ゆうめいな人ばかりでなく、明がい
 ちどもなまえをきいたことがない、かぞえきれないほどたくさ
 んの人たちの力なんだ。
 とおつしやいました。



二、大むかしの人々



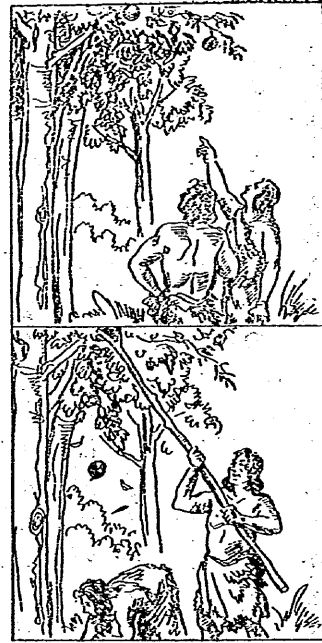
こんにちでは、私たちは、家をたてたのしくくらしていくことも、きものをきて寒さをふせぐことも、そしてまた、道具をつくってそれをうまく使うことも、よく知っています。しかし、ずっとずっとむかし、大むかしに、この世界に住んでいたいちばん古い人たちは、このようなべんりなくらしかたを、まったく知らなかったのです。人々は、あちらこちらを歩きまわ

りながら、木のみをひろい、さかなをとり、けだものをつかまえて、たべものにしていました。そして、手や、つめや、はなどを、たいせつなぶきにしていました。

しかし、人間がほかの動物とちがうところは、そのうちしだいに、道具をつくりだして、それをうまく使うようになったということです。人間がどんなふうにして道具をつくりだしたのかはよくわかりませんが、だいたいは、つぎにお話しするようなぐあいではなかったでしょうか。

人間はどんなふうにして、道具をつくるようになったのでしょうか

ある日のことでした。人間のそせんは、たべものをさがして歩いていました。すると、ある大きな森のなかで、おいしそ



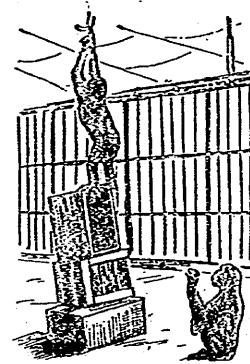
とどきそうにありません。上のほうは枝がほそいので、のぼっていつても、とちゅうで枝がおれて、おちてしまいそうです。人間は、うらめしそうに、木のみをみあげながら、「ああ、もつと、手が長かつたらなあ。」と、ためいきをつきました。そのころの人間には、こんなことが、きつとなんかいもあつたのだと思います。そのたびに、たべものにこまつた人々は、

「どうすれば、うまくとれるだろうか。」と、くびをかしげて考えこみました。けれどもそのうち、とうとうだれかが、長い木のぼうがころがつているのをみつけて、それをひろいあげ、「ああ、そうだ。このぼうで、あの木のみをたたきおとせば、とれるのではないか。」と考へついたのです。

人々は、このようにして、ぼうを使つて、今までとどかなかつた高い木のみもうまく手にいれることができるようになりました。ですから、ぼうは、人間の使いはじめたいちばんさいしよの道具であり、またぶきでもあつたわけです。

人間は、それからのちも、おなじようにして、ぼうを使うかわりに石をなげて、木のみをおとしたり、けだものをたおしたり、また手のかわりに、かいがらで氷をくみあげたりする、い

ろいろな方法をおぼえていきました。



チンパンジーがあきばこをつみかさねて、バナナをとるところです。

かうまく道具を使うそうです。

西洋のある学者が、このことを

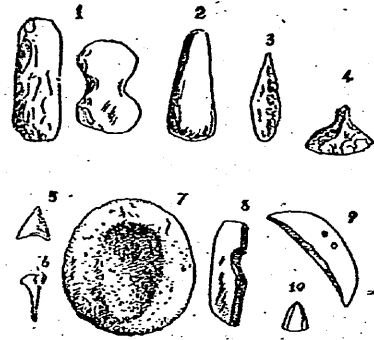
ためして見たことがありました。

その人は、チンパンジーのはいっているおりのそとに、バナナをおいておきました。チンパンジーは、おりのなかから手をおぼしてみましたが、どうしてもとできません。しかしそのうちに、どうとう、そこにおいてあったぼうきれに気がつくとい

それを使ってかきよせて、うまくとることができたということです。またチンパンジーの手がとどきそうにもない高いところに、たべものをつり上げておいたことがありました。するとチンパンジーは、はじめのうちは、せのびをしたりとびあがりして、とろうとしました。それでもだめだとわかると、そこにおいてあった木のあきばこをもってきて、その上にのつてとろうとしました。しかし、ひとつでは、とどきません。もうひとつかさねましたが、まだとどきません。どうとうみつみつみあげて、その上にのぼり、たべものをとつたということです。けれども、チンパンジーには、それ以上のことはできませんでした。道具を使うことを知っていても、道具をつくりなおして、もつとよいものにすることはできなかったのです。また自

分の考えついたこと、發明したことを、しそんにつたえることも知らなかったのです。ですからしそんは、そせんからつたわったものを、自分のくふうでもつとべんりなものにしていくということができませんでした。

石は、いちばん古い時代の人々にとって、ひじょうにたいせつな道具でした。ことに、するどい石のかげらは、つかまえたけだものを切りひらく小刀のやくめをしましたし、ぶきとしてまたいへんべんりでした。しかし、そのような石は、ほしいとさにどこにでもみつかるとはかぎっていません。人々は、石の多い川原へいたり、山のなかを駆けまわったりして、つごうのよい石を手にいれようと苦心していました。ところが、こんなふうにして、道具にするのにつごうのよい



これは大ひかしの石でつくられたさまざまな道具です。1.2.8は石のおの、3は石のやり、4は石さじ(石の小刀)5.10は石のやじり、6は石のきり、7は石のさら、9は石のほうちょう

石をさがしているうちに、人は、いろいろな石には、そのかたちやおもさのちがいによって、それぞれつの使いみちがあることに気がついてきました。そして、そればかりでなく、石のかたちを思う

ようにかえることさえ、やってみるようになってきました。

このようにして、人間のそせんは、道具をもつとよいものにつくりなおすことをはじめたのです。まずさいしよは、石と石と



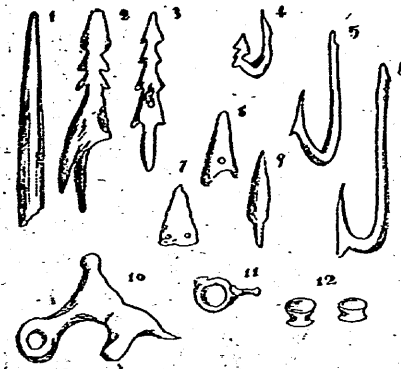
をうちあわせて、自分の思うようなかたちの道具をつくること
でした。これは、なにかのひょうして、手にもつていた石を下
におとしたとき、それがほかの石にあたつて、うすくわれるの
をみて思いついたことかもしれません。また、このように、石
と石とをうちあわせて、思つたかたちにするためには、かたく
ておもしろい石を使うとうまくいく、ということもわかつてしまし
た。

しかし、あなたがたも、きつとおわかりでしょう。石と石と
をうちあわせて、自分の氣にいった石の道具をつくるというこ
とは、たいへん時間のかかるくろしいしごとです。けれども、
このめんどろな、こんきのいろしごとを、人々はいっしょうけ
んめいやりとおし、自分の思うような石の道具をつくつたので

した。よい道具さえ使えば、まえよりも、なんばいもなんばい
もらくに、しかも早く、木を切つたり、物をけずつたり、つか
まえたけだもののかわをはいたりすることができます。おいし
いたべものも、たくさん手にいれることができるようになりま
す。そう思うと、このことは、時間がかかつてくるしくても、
がまんのできるしごとだつたといえます。

はじめのうちは、つくりかたもへたで、かたちのよいものが
できませんでしたが、あれこれとくふうをかさね、いつそうべ
なりな、そしてりつばなものをつくるようになりました。人々
は、やがて石と石とをこすりあわせると、石のさきがするどく
なることに氣がつかしました。またおなじようにして、石の道具
のおもてを、なめらかに、きれいにみがくことも、思いつきま

した。こんなふうにして、はじめのころとくらべれば、たいへんすぐれた道具がつくられるようになってきたのです。ですから、そのころの道具には、ひじょうにこまかな、りっぱなさいくのものが見られます。



ほねでつくられた道具です。1 ははり、2, 3 はもり、4, 5, 6 はつりばり、7, 8, 9 はやじり、10, 11 はこしにかざるもの、12はくびかざり。

石おのにあなをあけて、そのなかに木のえをさしこむことは、なかなかほねのおれるしごとですが、このころになると、人々はそれもやれるようになった。そのほか、かりをするのにべんりな弓矢が発明されてから、えものも

ずつと多くなってきましたが、けだもののほねやつのは、かたいうえにかるいので、道具の材料にするには、たいへんべんりでした。そこで、石の道具をりっぱにつくった人々は、つの道具も、やはりみごとにつくるようになりました。

このようにして、しだいにべんりな道具ができてくると、これまで、手だけではとてもやれなかつたしごとが、かんたんに行えるようになりました。ですから、もうそのころ、道具は、人々の生活にとって、なくてはならないものになっていました。

人間は、どうして火をおこしたか

「人間は火を使う動物である。」といわれています。火を使うことは、人間だけのできることで、ほかの動物には、まったくみられないことです。ですから、火をおこして、それを使うこと

は、人間が大むかしからしとげた発明のうちで、いちばん大きなもののひとつといえるかもしれません。

はじめ、人間は、火をたいへんおそろしいものと考えていました。あなたがたも、ものすごい山火事にあつたようなとき、はげしい火のいきおいをすぐ目のまえてみたら、思わず、「こわいなあ。」とつぶやくにちがいありません。そのころ、の人も、かみなりがおちたあとなど、大きな山火事がおこつたときには、こわくてからだがふるえるほどだったでしょう。

しかし、人間は、山火事のあとに、



やけ死んでたおれでいたけどもののにくが、なまてたべるより、たいへんおいしいことに気がつきました。また、ふだんはおそろしいけど、火をみると、おそれてにげていくということも知りました。そこで、今までおそろしいと思つていた火は、人々のくらしに、いろいろと役にたつものだということが、だんだんわかつてきたのです。こうなつてくると、これまでおそろしいものと考えていた火を、自分のすまいにもちかえてみようという、ゆうかな人もあらわれてくるものです。さあ、そのような人の家では、いったいどんなふうに、くらしのしかたがかわつてきたでしょうか。

火を使いはじめから、人々は、たいそう寒いときでも、あたたかくすごすことができるようになりました。そのうえ、に



あかりが、むかしから今まで、どんなふうにかわって来たか、しらべてもらいなさい。

くも、火にあぶると、おいしくたべられます。夜になっても、すまいのなかにはあかるいので、その火をかこんで、しごとをするのができます。このように、火を使うことによつて、人々のくらしは、まえより、ひじょうにべんりになったのでした。

しかし、いったん火がきえてしまうと、火を使うことを知っていても、まだ火をおこす

ことを知らなかった人々は、こまってしまいました。そこで、なんとかして火を自分の力でおこそうと、くふうするようになりしました。だれが、はじめて火をおこしたのか、ということはわかりませんが、その方法は、たぶんかわいた木と木とをこすりあわせてみたのだと考えられています。



アフリカの人々のなかには、この絵のように、むかしのままの方法で、火をおこしているものもあるそうです。

ひよつとすると、人間は、森の木が風にふかれて、こすれあつて火をだしているのをみて、そのまねをしたのかもしれない。とにかく、この発見をもとにして、人間は、かたい木のぼうを、いたの上でぐるぐると、けむりがでるまでまわしつづけ、そこからほのおがでて、木のくずにもえう



火をおこすいろいろなやりかたを、上の絵から考えてもらいたい。私たちは、今どんな方法で火をおこしていますか。

つるようにする、という方法を考えたのでした。大むかしには、この方法がいちばん多く使われていたようですが、それにしても、たいへん時間のかかる、くるしいしごとだったわけです。今でも、アフリカなどには、こんな方法で火をおこしている人々がいるということです。

こんなわけですから、人々は、いったんおこした火は、けつしてけさないようにと、みんなで心をあわせ、ちゅういしあつていました。まきをすこしずつくべて、晝はもちろんのこと、ひとばんじゅう、火のばんをしていたということです。

しかしそののち、人々は、もつとかんたんに火をおこす方法をみつけました。それは、かたい石と石とをうちあわせたり、鉄と石とをうちあわせたりして、火をおこす方法でした。こと

に、鉄と石とをうちあわせる方法は、マッチの発明されるまで、長いあいだ使われていたものです。

いちばんはじめに、人間の住んでいた家

人間は、さいしよのころ、木の上を、自分のすまいとして、ねとまりしていたといわれています。また、大きな岩のかけや、大きな木の下や、くぼんだ土地や、やぶのかけなどのような、ちよつとした、かくれ場所に、からだをよこにしてねむっていたといわれています。

人間のさいしよのすまいは、雨やつゆや風をかんだんにふせげるくらいのもつなものでした。しかしそのうち、人々は、すばらしいすまいをみつけました。それは、ひとりてにできているほらあなです。そのなかには、けだものがすんでいたもの



石のランプを使って、ほらあなのかべに、絵をかいているヨーロッパの大むかしの人です。ヨーロッパにはこのような絵のかいてあるほらあながたくさんあります。

もあつたことでしよう。そんなときには、人々はけだものをおいはらつて、自分たちのすまいにしました。

ほらあなは、ほかのかくれ場所より、寒さをふせぐのにべんりでした。また夜になつても、おそろしいけだものから、みをまもるのにつごうがよかつたのです。それで、大むかしの人々にとっては、ほらあなは、たいそうよいすま

いだったのでした。

人々は、夜になると、ほらあなにはいり、入口に石や木の枝などをつみかさねて、おそろしいけだものにみつけれぬようにしました。そのうえ、人間が火を使うようになってからは、



これは、ほらあなのすまいのなかの生活です。おとうさんは、火でなにかやいています。おかあさんは、ぬいものをしてるようです。

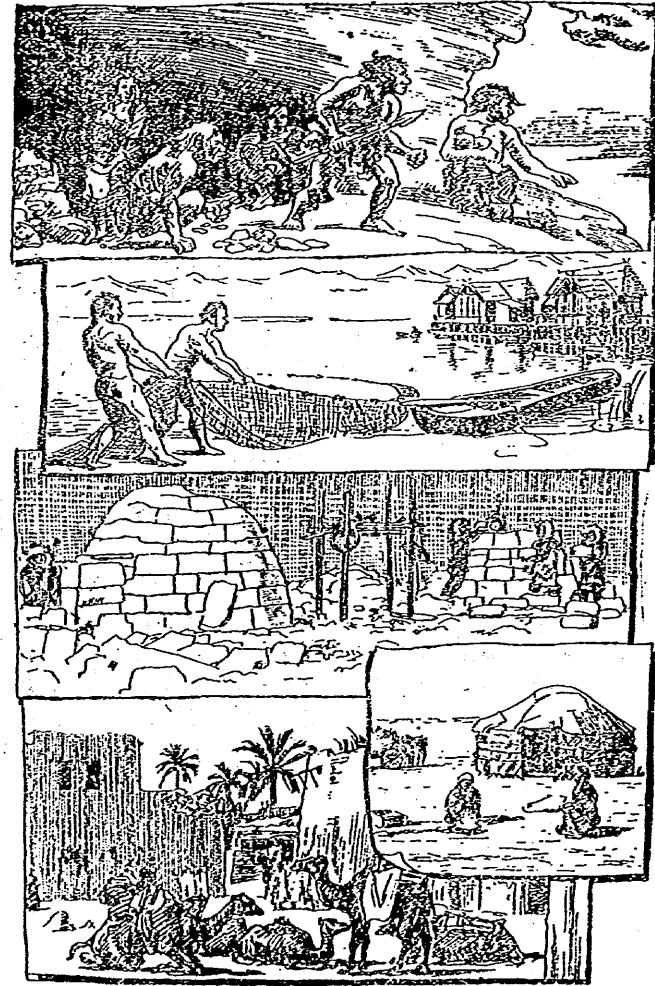
ほらあなのすまいのほうが、火をけさないようにするため、つごうがよいということもあつたのです。

このほらあなのすまいには、たいへん大きなものがありました。なかに、長さが三〇メートル、はばも、廣いところになると、十

七、ハメートルほどのものがあつたということです。

しかし、ひとりてにできているほらあなは、うすぐらいうえに、じめじめしていて、いごちのよいものではありません。そこで、人々は、力をあわせて、木や石の道具で、ほらあなのなかのかべをけずり、ゆかをたいらにし、入口のふきんには、火をたくためのあなもほりました。そして、しだいに家らしいかつこうをつくっていきました。

そののちも、人々は、もつと住みよい家をつくらうと、たえずくふうをしていました。そして、あるところでは、人々は、石をつんで、こやをつくり、雨や風をふせぐために、そのうちがわを、ねんどでかためました。また、あるところでは、土地にあなをほり、はしらをたて、やねをふいて、すまいをつくる



ことをはじめたようになったのです。こうなればもうりっぱに、人間の力でつくった家だということができるでしょう。

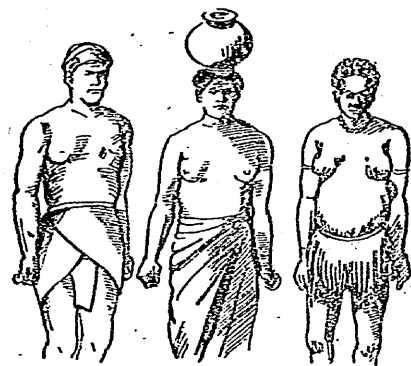
ところが、このようなふつうの家のほかに、この広い世界には、たいへんかわったすまいをつくっていた人々もいました。それは、わざわざ、岸に近い水の上に、すまいをつくって住んでいた人々です。このような家は、みずうみの多い土地によくあったもので、ヨーロッパの山國スイスなどからも、そのようなすまいのあとがみつけたされています。今でも、南洋のあつい地方では、こんなすまいに住んでいる人々がいます。

こういう人々は、どうしてこんな水の上に、わざわざすまいをつくったのでしょう。それはたぶん、おそろしいてきやけだものが、おそいかるのをふせぐのにつごうがよかったからだ

と考えられます。

人間はどんなきものをきていたでしようか

たべものにするために、つかまえてころしたけどものかわを、いったい人間はどうしまつたのでしようか。ほらあなを



大むかし、人々は、このようなきものをきていました。日本でも、大むかしの人は、こんなきものをきたことがあります。あつい地方では、今でもこんなきものをきる人々があります。

すみかとしていた人々は、きつと、ほらあなのすみの方にすみかさね、夜になると、寒さをふせぐために、それをかぶったり、下にしいたりしてねむったことでしよう。人間のさいしょのきものは、このようなけだもののかわたとい



むかしの人々のうちには、こんなきものをきていたものもありました。インドではこんなきものをきている人もあります。

われています。

それでは、人々はどういうわけで、毛がわをきはじめたのでしようか。それは、寒さをふせぐため

毛がわが美しかったので、それをきておしやれを試みたかつたのでしようか。それはどちらだったか。よくわかっていません。

しかし、だれかがきつと、自分のからだをすっぽりつつむことのできるような、大きな毛がわをほしくなったのでしよう。そして、そのために、



日本の大むかしの人も、やはりこんなきものをきていたときがありました。

たぶん、はじめは、一まい一まい毛がわにあなをあけ、ほそ長い毛がわや木のかわ、草のくきなどで、むすびあわせてみたのでしよう。このようなことをくりかえして、人々はしだいに、ものをぬうということをおぼえていったのでした。

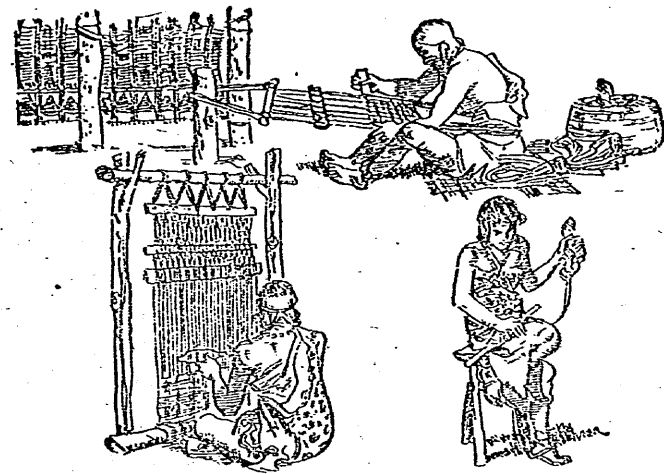
しかし、あなたがたも知っているように、けだもののなまのかわは、かたくてごつごつしていて、きもちのよくないものです。それで、人々は、いろいろな石の道具やつの道具を使って、なんかいいものなんかもけずったり、水にひやしたり、あるいは、あぶらのようなものをなすったりして、やわらかくなるようにくふうしました。

こうして、はじめで、かたいなまのかわは、からだにさわってもきもちのよい、りっぱな毛がわになりました。人々は、は

じめ、このようにして毛がわをきものにしたり、しきものにしたりしていったのでした。

しかし、毛がわは、きものにするには、まだかたくて、よいものとはいえません。それに毛がわは、ほしいときに、いつでも手にはいるとはかぎっていません。ことに人々が、かりゅうどやりょうしのようなくらしをやめて、だんだんひやくしうらしいくらしをはじめると、毛がわは、ますます手にいれにくくなります。そこで、人々は、なんとかして、ほかのものをきものの材料にしたい、と考えはじめました。

そこで、人々が氣づいたのは、やわらかくてじょうぶな、長い草のくきや、木のすじをよりあわせて、それをたてとよこに、かわりばんこにくんであむ方法でした。この方法を使ってはじ



大むかしの人々は、こんなふうにして、きもののきれや、しきものをつくっていたのでしょう。

めて、人々は、たいへんやわらかいきものをつくりだすことに成功したのです。

このようにして、人々は、それこそ、なん千年もかかって、しだいに、りっぱなきものの材料をみつ、け、それで、おりものをつくるようになっていったのでした。

動物をならし、植物をそ

だてることをはじめた人間

はじめ、人間は、かりやりようをしながら、動物をつかまえて、自分たちのたべものとしていましたが、そのうち、こんどは、けだものをころしてしまわず、よくかいならして、いろいろ役にたたせることができるようになりました。

いったいどういうわけで、人々は、けだものをかいならすようになつたのでしょうか。

人間は、弓矢のような、かりにはたいへんつごうのよい道具を發明しました。しかし、それでも、かりをすることは、らくなしごとではありませんでした。そのうえ、きせつによつて、えものがおおいとき、すくないときがあります。とりやけだものが、たくさんいるきせつには、えものが、たくさんあつ

て、たべきれないほどでしたが、とりやけたものがすくなく
せつになると、どうしてもえものが手にはいらず、たべものに
こまることもよくありました。こんなとき、つかれきつて、お
なかのすいた人々は、きつと、とりやけたものが、いつでも、
ひとつの場所にたくさんあつまっていればよいのに、と思つて
くやしがつたことでしよう。

ところがあるとき、たいへんあたまたのよいひとりの人が、け
だものをいけどりにしてきて、自分のすまいの近くに、かこい
をつくつてやしなつておいたらどうだろう、と思いつきました。
そうすれば、ほしいときにそれをころして、にくでも、かわで
も、道具にするつのも、すぐ手にいれることができるわけ
です。このときから、人々は、けだものをでるだけたくさんい



これは、エジプトの大ひかしの人々が、水牛にすきをひ
かせたり、くわを使ったりしているありさまです。

けどりにして、かつておくようになりました。
いちばんさいしょ、人間がかいならしたけ
だものは、いぬだといわれています。いぬは、
動物のうちでは、こんにちまで、ほんとうに
長いあいだ、人間にいちばんよくなれた、な
かのよい友だちでした。いぬもはじめは、に
くやかわをとるためにかつていたのでしよ
うが、そのうち人々は、いぬが、人間のいうこ
とをたいそうよくきく動物で、かりにつれて
いけば、ひじょうに役だつということを知っ
たのです。それで、人々は、にくやかわをと
るよりも、こいぬのうちからかいならして、ばんをさせたり、



エジプトの大むかしの人々が、
うしのちちをとっているところ
です。この絵は、古いかべ
にかいてあったものです。

かりにつれていたりしたほうが、かえってためになることに
気づいたのでした。このことはうし、うま、ひつじ、やぎ、ぶた
などについても、おなじでした。つかまえてすぐころしてしま
うよりも、えさをたべさせて、そだてたほうが、大きくもなる
し、かずもふえてくることがわかったのです。

こうして、人々は、動物をかいならすばかりでなく、そだて
ることもおぼえました。そのために、どんな
に人々のくらしがらくになったことでし
ょうか。これで人々は、かりのときに、えもの
すくないことを心配するひつようはなくなっ
たわけです。

そのうえ、にやかが、たべものやきも

のとして役だつばかりでなく、ちちをとることのできるものも
あるし、人間のかわりに、おもい荷物をはこんでくれるものも
あります。そこで、人々は、いろいろのけだものを、それぞれ
の使いみちにしたりがって、いつそう役にたつようにかいならし
たり、よいしゅるいのものにかえたりするようになっていきま
した。

しかし、どんな土地の人々でも、みんながおなじように、動
物をかいならすようになったのではありません。メキシコのむ
かしの人などは、うしやひつじをならすことを知りませんでした。
また、こんにちでも、まだ、私たちがかいならすことので
きない動物もいます。人々が、はじめに、動物をかいならした
ときは、こんにちほど、そのしゅるいがたくさんあったわけで

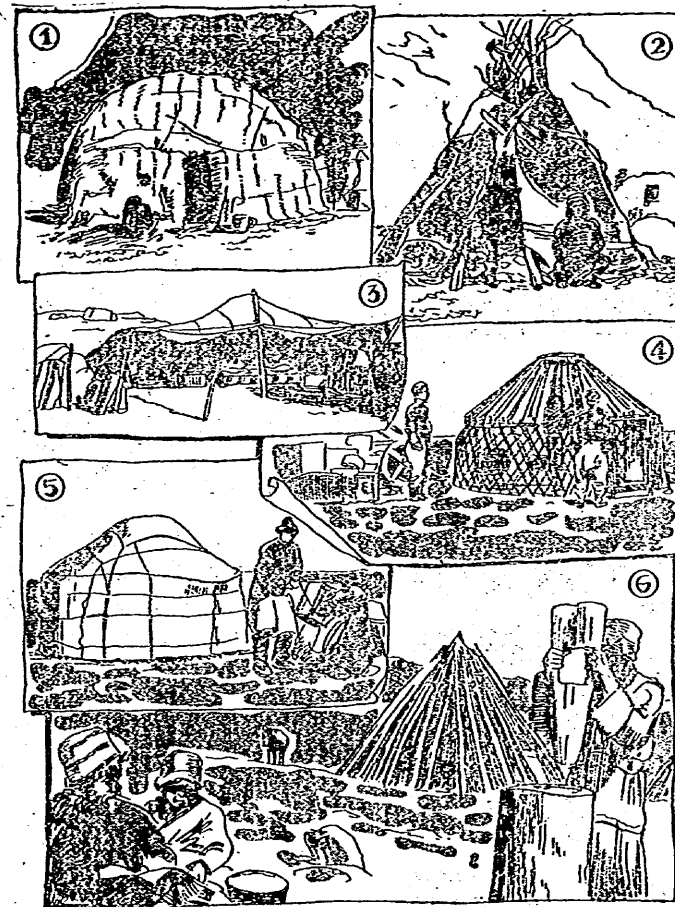


ひつじを飼っている今のぼく
じょう



いろいろなかちく

はなかつたのです。
このようにして、人々は、動物をかいそだてることをおぼえ
ましたが、そののち、かりやりようをやめて、動物をかいそだ
てることだけをしごとにする人もでてきました。そういう人た
ちは、うしやひつじをかいながら、うしやひつじにたべさせる
ことのできる、やわらかい草のたくさんはえているところをさ



これは、いろいろな土地で、かちくをおいながら旅をしている
人々の家をしめたものです。

①あつい土地に住むベルシアの人々 ②ヨーロッパの北の土地
に住んでいるラップの人々 ③ひつじをかうアフリカの人々
④⑤⑥アジアに住んでいるいろいろな人々



がして、旅をつづけたのです。今でも、モ
ウコの地方には、このようなくらしをして
いる人々が住んでいます。

動物をかいそだてることをした人々は、こ
んどはおなじように、野にはえている植物をそだてることをや
りました。これまでも、男の人たちが、とりやけだものをさが
して、野山を歩きまわっているときに、女の方は、のいちご・
くるみ・りんご・なしのような草のみ、木のみをさがして、は
たらいていたのです。ですから、男の人も、女の人も、いちに
ちじゅう、たべものを手にいれるために、いそがしいくらしを
しなければならなかったわけです。すこしでもなまけると、た
ちまち、おなかがすいて、うえじにをってしまう心配がありま



それは、石のくわでたがやし
ていところす。こんなく
わでは、どんなに力があるこ
とでしょう。

す。そこで、人々は、動物をつかまえてきて、それをそだてた
ように、野にはえた植物を、自分たちで、そだてることをはじ
めたのでした。

人々は、そのために、おいしいたべもののとれる植物のまわ
りにはえているさやそうをひきぬいて、すくすくとのびそだつ
ようにしました。また、ひとりのちゅういぶかい人は、どって
きた草のみのたねがこぼれおちたと
ころに、一年たつと、新しいめがて
て、おなじ草のみがはえてくるのを
発見しました。小さいたねから、大
きなみがとれる。そこで、人々は、
たねをまいて、植物をそだてること

をおぼえたのです。

こんにち、私たちのたいせつなたべものをつくってくれる農業というしごとも、もとは、このようにして、はじまったものなのです。はじめは、ほんのおぎないぐらいにしかならぬほどのものだったのですが、やりかたをくふうすれば、どしどしたべものが手にはいることがわかったので、あちらこちらで、農業だけをしごとする人がでてきました。



それに、道具もしいだいによくなってきましたから、もう農業は、女の人だけにまかしておけるしごとはなくな



まめ・ひえ・あわ

って、男の人たちが、力をあわせ、それをせんもんにしてやらなければならぬほど、たいせつなしごトになってきました。

金ぞくの道具

まえにもお話ししたように、はじめ、人間は、ほかのけだものとおなじように、長いあいだ、道具を使うことを知らずにいました。しかし、そのうちに、どうとう石の道具を使うことをおぼえて、それをいろいろつくりかえて、しだいに、べんりな道具をつくりだすようになりました。

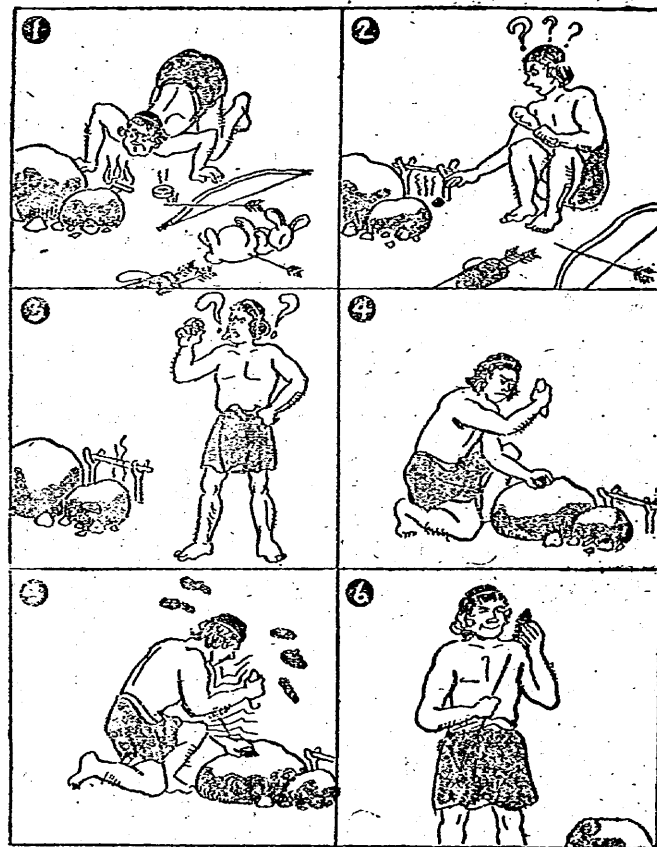
人々のくらしも、それにつれて、だんだんべんりになり、らくに生活していくことができるようになりました。しかし、こまでいくには、ほんとうに、長い長いとしつきがたっていたのです。そのうえ人間は、それからあとも、なん万年も、なん

万年ものあいだ、石の道具ばかりつくりつづけてきました。そしてやつと、けだものをかい、農業をはじめるところになって、銅でこしらえた道具を使うようになったのです。

人間の使っていた石のおのほ、けだもののかたいあたまやほねをうちくどき、どうかしたはずみて、ひびがはいってわれてしまうことが、たびたびありました。ですから、人間はいつも、もつとよい道具はないものかと、考えつづけていたにちがひありません。もちろん、つやほねの道具もありましたが、それでは、おもい大きな道具はつくれません。だいいち、材料がたくさんはありませんでした。それに、石の道具をつくるのにぐあいのよいかたい石も、長いあいだ、人間が手あたりしだいに使っているうちには、だんだん、みつかりにくくなつて

きたことでしよう。このことは、石の道具や石のぶきにばかりたよつてくらしていた人々にとつては、すておけないたいへんなことでした。道具がなければ、たちまち、まいにちのたべものにもこまつてしまうからです。そういうわけで、人間は、目をさらのようにして、もつとほかに道具にするよい材料はないかと、さがしまわつたのでした。

ところが、あるとき、道具にする石をさがしまわっていたひとりの人が、みなれないめずらしい石をみつめました。みどり色をしたおもい石です。道具にこまつていた人間は、ためしにこれを、かたい石でたたいてみました。ところが、ふしぎなことに、その石はわれなくて、つぶれてひらたくのびていくてはありませんか。ただけばたたくほどうすくひろがつて、いたの



これは、大ひかしの人が、どんなふうにして金ぞくを使うようになったかということをそらぞらして、絵にかいてみたものです。あなただけも、ひとつ考えてもらいたい。

ようになっていくふしぎな石。手でまげてみると、いくらでも思うようにまがる石。まんなかをたたいてみると、へこんでさらのようなかたちにもなります。「これはいい道具になる。」人間は、きつとこう思ったにちがひありません。石だと思ったこのめずらしいものが、銅だったのです。こうして、人間は、銅を道具に使うことを考えつきました。

人間が、早くから知っていた金ぞくには、あのびかびか光る、美しい金がありました。いちばんはじめに、道具にした金ぞくは、銅だったのです。

いろいろな金ぞく。今、私たちは、かぞえきれないほどたくさん金ぞくを使っています。きん・ぎん・どう・てつ・すず・ニッケル・あえん・なまり・アルミニウムなどのほか、人々がそれらをもとにして新しくつくりだした金ぞくもあります。これからも、もつともつと新しい金ぞくがつくりだされていくでしょう。

この新しい銅の道具を使いはじめた人々のうちのだれかが、

あるとき、それを火のなかにいれました。それは、ふとしたはずみで、火のなかへおとしたのかもしれない。それとも、わざとためしにやってみたのかもしれない。そのとき、あつ火のなかで、どろどろにとけた銅は、火がきえて、ひえてくると、こんどはかたくかたまるといふことがわかりました。人間は、そのときから、ねんどや石のかたのなかに、とけて、どろどろになつた銅をながしこんで、思うようなかたちをつくることをおぼえたのでした。

しかし、これだけでは、銅の道具は、まだりっぱなものとはいえません。銅でつくつたおのは、かたい石のおのにくらべると、はもまがつたり、つぶれたりしやすくて、こまります。銅を使つて、もつとかたい道具ができないものでしょうか。つぎ

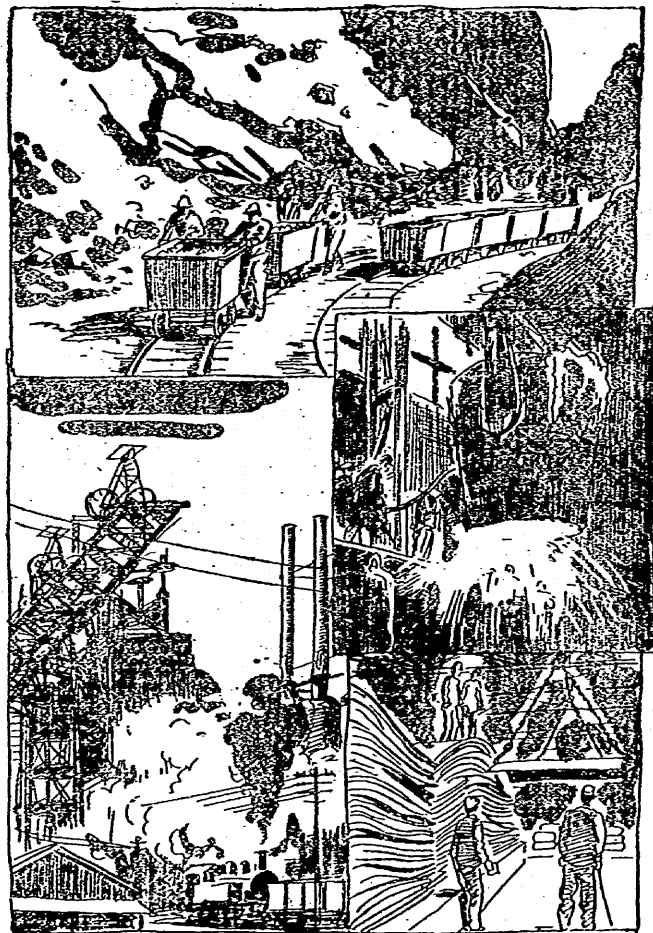
に、人間が考えたのは、このことでした。



これは、ヨーロッパの大むかしの人々が使っていた、めずらしい金ぞくの道具で、いろいろこまかいさいくがしてあります。

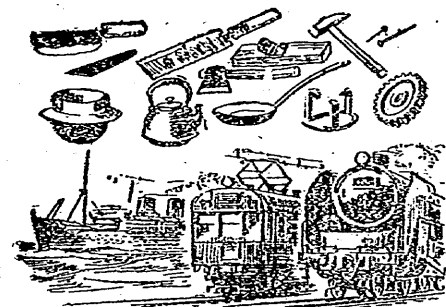
人間は、銅といつしよに、よく土のなかから、もうひとつべつな金ぞくを、みつけたすことがありました。それは、銅よりも、もつと、火にとけやすいです。火にとけやすさ、銅といつしよに火でとかしてまぜてみると、ふしぎなことに、銅よりも、すずよりも、すつとかたくて、じゅう

ぶん道具に使える、新しい金どくができあがりました。これが青銅です。こうして、人間は、いつのまにか青銅をつくることをおぼえたのでした。人間は、それから、もう石で道具をつくることをやめて、青銅の道具をつくりはじめました。青銅は、ねつをくわえると、やわらかくなり、うつとたいへんかたくなります。ですから、私たちのそせんにとっては、たいへんべんりなものだったにちがいありません。こんな大むかしに、こんにちの私たちとおなじような方法で、青銅をつくっていたということには、ほんとうに、おどろかされるではありませんか。しかし、銅やすすも、どこでも、すぐにみつかるというものではありません。人間は、それをみつげるために、地めんの下までほりかえして、さがしまわらねばなりません。こう



これは、今のすすんだ鉱山（炭坑）と、金どくをつくるいろいろな工場のありさまです。

して、今なら鉄山とよばれるものが、あちこちにあらわれてきたのです。こんにちのべんりな世の中で、たいせつなしごとになっっている鉄山業は、このようにしてはじまったのでした。



これは、今の世の中で使われている鉄の道具です。あなたがたも、このほかにどんなものがあるかしらべて、絵にかいてごらん下さい。

そのうちに人間は、青銅にくらべると、みたところはきたないけれども、つくりかたしい、どぎかたしいで、青銅よりも、もつともつと、じょうぶで、するどいばものになる鉄を発見しました。そして人々は、さっそく鉄で、はものや、そのほかのいろいろの道具をつくりはじめました。

鉄の道具は、銅や青銅の道具にくらべて、かたくて、じょうぶで、長もちするうえに、きたえればきたえるほどするどくなるので、ほかの材料でつくった道具よりも、ずっと使いみちがたくさんあったのです。ですから、人間が、鉄の道具を使いはじめると、私たちのくらしも、びつくりするほど、よくなってきました。石の道具を使って、なん万年ものあいだに、ほんのすこしずつよくなってきた人間の生活が、鉄の道具を使うようになると、それよりずっとみじかいあいだに、たちまち、こんにちのようなべんりな世の中をつくりだすほどにすすんでしまったのです。

けれども、この広い世界には、まだほとんど石の道具しか使

つていないような人々もいます。南洋の島々には、さいきんまで、石の道具を使っていた人々もいました。また、北の寒い地方に住んでいるエスキモー人や、オーストラリアのひらけな地方に住んでいる人々のなかには、ごくちかごろまで石の道具を使つてくらしているものもあります。こういう人たちは、も

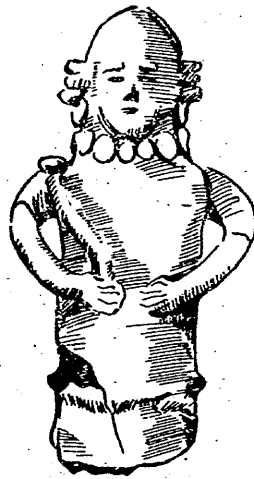


エスキモーの人々は、石のなげやりをなげるとき、それを手もとでばさんでおく石の道具を使っていました。上の絵のように、この道具をにぎってなげると、やりだけがおくにとんでいきます。大むかしの人々は、これにたものを使っていたのです。

つとべんりなすすんだ道具を、めつたに手にいれることもできないし、また手にいれても、じゅうぶんに役だたせようとしなからなのでしょう。

しかしそれは、けつして人のこだけではありません。私たちも、

そせんから受けついでいろいろなものに、もつともつとくふうをくわえて、つねに新しいすすんだものをつくつていくようにしないならば、いつまでたつても、今以上によい生活をするにはできないと思います。今の世の中は、むかしにくらべれば、たしかにべんりになっていますが、それでも、私たちのまわりには、こまつたことやふべんなことが、たくさんあるのではないのでしょうか。



エスキモー
の
石の
道具

三 私たちのそせんはどんな生活をしていたか

—日本の大むかしの人々—

石の道具を使っていたころの日本のそせんのくらし

かりをする人々

私たちのそせんもやはり、はじめは、石の道具を使うことしか知りませんでした。そして、まいにち野山をかけまわって、木のみや草のみをあつめたり、けだものをとらえたり、



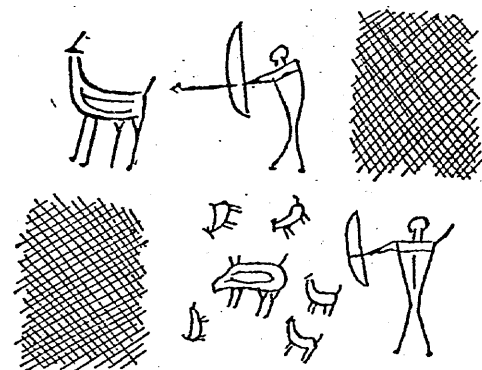
あさや川でさかなをとったりして、たべものとしていました。

この絵は、そのころの、森のなかのかりばです。木のおいしげった山のなかを、なんびきのしかがにげまわっています。むこうの方には、てんてに木のぼうやえだをもち、わあわあとさけび声をあげて、しかをおいたてている人々がみえます。そのよこの方には、おいたてられていくしかにねらいをつけている人々、すきをみては、やりをなげつけようとまちぶせている人々、などがいます。ひとりのりっぱな老人が、あれこれとまじすをしているようです。

ごらんなさい。にげまよった一びきのしかが、だんだん森のすみの方においつめられていきます。よくこえた、大きなしか

です。あつ、どうとう、しかは、あなのようなもののなかに、
ころが^{ころが}ごんてしまいました。おとしあなです。うまくおとし
あなにおい^{おい}こんだ人々は、「わあつ。」と、よろこびの声をあげて
います。

かりがおわりました。小さなえも
のは、かたにぶらさげ、大きなえも
のは、木のぼうにさし、みんないき
おいよく山をくだっていきます。え
ものが多いので、だれのかおもうれ
しそうです。家の近くまでくると、
かりのもようを心配してまっつていた
女や子どもたちもとびだしてきて、



これは、日本のむかしの人々が金ぞくの道具
にかいたかりの絵です。

大よろこびをしています。

そのうちに、えものをまんなかにおいて、よろこびのえんか
いがはじまります。よつてたかつてかわをはぎ、石のおのでは
ねをたたき切ります。切りとつてやいたにくをほおぼり、よろ
こびのうた声をはりあげて、おどりにむちゆうになるものもあ
ります。それはそれは、たいへんなさわざです。みんなが、お
どりつかれてえんかいがおわると、人々は、なかよくえものを
わけあい、めいめい自分の家にもちかえります。

道具づくり

かりやりようにでかけないとき、人々がしなければならな
かつたたいせつなしごとのひとつは、道具づくりということてし
た。今のように、買物にでかけて、なんでもほしい物を買って

くるといふことができなかったのですから、大むかしの人々は、めいめい自分の家で、ひつような道具をつくったのです。

そのうえ、まえにもお話ししたように、かりにひつような矢じりややり、それに土をほりおこしたり、だいくしごとに使ったりするおのなど、みんな石でつくらなければなりませんでした。

石の道具 石の道具にはいろいろなものがありました。やり・つるぎ・おの・やじりなどのぶき、ほうちよう・小刀、けもののかわをはく道具、ぶきと道具をかねた石のぼうなどです。

左手に、けもののかわをもつて、そのあいだにかたいうすい石をはさみ、右手にもったかたいしかのつので、石のまわりをパチパチとうちくだいて、するどいはをつけていきます。石の矢じりは、こんなふうにしてつくったということです。

つりばりやさかなをつくもりなどのりようの道具も、石とお

なじようにかたいしかのつのでつくられました。つのは、さいくがしやすく、小さいものをつくるのにつごうがよかったからでしょう。そんなときも、石で、いちいち、つのをけずって、こしらえたものです。

こんなにほねがおれるしごとを、日本の大むかしの人々は、ずいぶん長いあいだ、やりつつづけていたのです。

石や、つのの道具のほかに、土の道具もありました。今のせどものようなものです。ねんどで、はちやかめのようないれもののかたちをつくり、火でやいてかためるのです。

ねんどを火でやくとかたくなるということを知って、そのやりかたで土のうつわをつくることをはじめたのは、どののだれだかはわかっていません。しかし、日本の大むかしの人々は、

ねんどてわをつくり、それを下からだんだんにつみかさねて、はちやかめをつくることをはじめるといふようになりました。

世界のほかの土地では、ねんどをひ

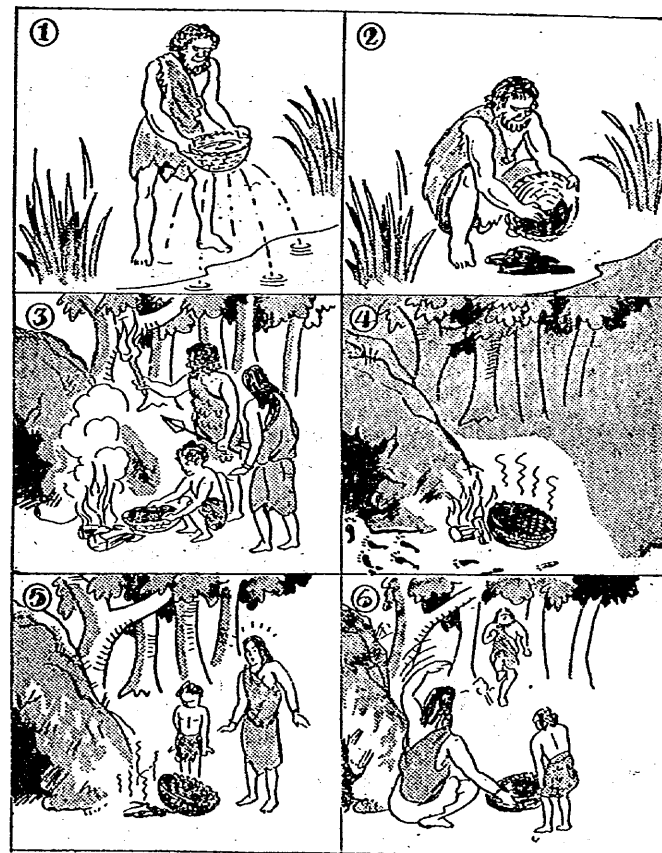


手でこねあわせて、土のうつわをつくるところです。

このような土のうつわのつくりかたを、よく知っていました。しかし、それもはじめは、ただ、ねんどを手でこねあわせて、いれものをつくっていただけでしたが、それでは、そのふかい、大きないれものをつくるのには、ふべんです。そこで人々は、



まきあげてつくる土のうつわ。日本の大むかしの人々は、あまりこんなやりかたはしなかったようです。あなたがたも、ためしにやってみてごらんさい。



これは、土のうつわがどんなふうにしてつくられるようになったかということをそうそうして、絵にかいてみたものです。



これは、日本のむかしの人々の使っていた土のうつわです。日本の大むかしの人々の使っていた土のうつわには、いろいろな形があります。そのひとつは、うすまきやなわのめのもうのはいったものでした。人々はそのうちに、もようはかんたんでも、つくりかたのすすんだ土のうつわをつくるようになります。さし絵の右のうつわは古いもので、左のうつわは、それよりあたらしいものです。

ものようにひねつて、それをだんだんまきあげて、うつわをつくるというやりかたをして、いたところもありました。日本でも、

いなかにくと、これによくにたやりかたをして、ただ、手でぐるぐるまきあげるかわりに、下の台をぐるぐるまわしながら、うつわをつくっているのがみられます。

日本の大むかしの人々は、このうつわが、たいへんすきでした。石の道具とちがつて、自分の思うようになかたちにつく



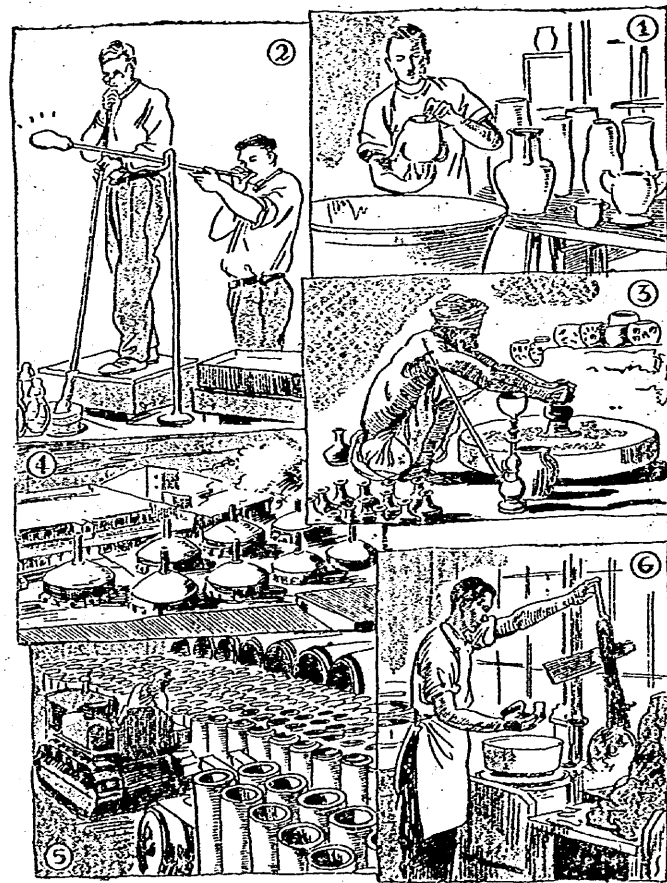
アフリカの人々は、今でもこんなふうにして土のうつわをつくっています。

すし、火でやくまえに、思うように美しいもようをつけることもできます。

人々は、この土のうつわに、かりやりようで手にいれたたべものや、野や山であつめてきたおいしい木のみや、草のみなど

をいれておいたり、食事のときに、ごちそうをいれて、ならべたりするのに使ったようです。

海からかいをひろつてきて、たべものとしていた人々は、それを、自分のすまいの近くにすてました。それが、いつのまに

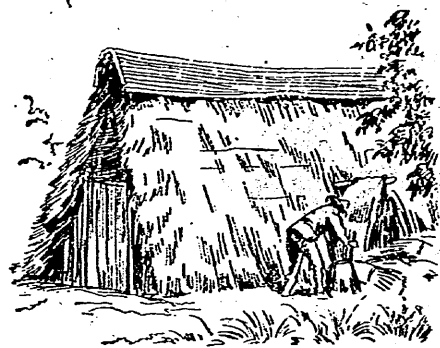


①③⑥は、ねんどでつくられるいろいろなうつわのつくりかた。
②は、ガラスのうつわのつくりかた。④は、れんがをつくる大きなかま。⑤は、どかんをあつめてあるところ。これらは、ねんどや、そのほかの土の材料でつくられるいろいろなうつわです。

かたくさんつもって、今でもあちらこちらから、かいがらをす
てたあとが発見されます。かいづかといわれるのが、これです。
このなかから、かいがらといっしょに、土のうつわ、石の道
具などがでてきます。かいづかは、大むかしの人々のごみすて
ばだったのでしょうか。

住んでいた家

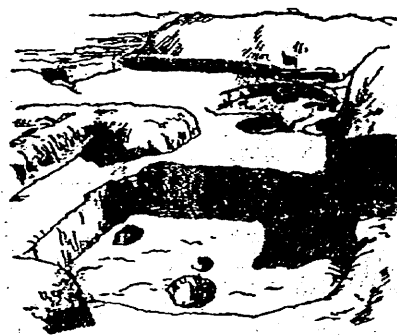
あなたがたは、日本の大むかしの人々が、どんな家に住んで
いたと思いますか。おしむことに、そのころの家は、今では、
ひとつものこつていません。しかし、石の道具や、土のうつわ
などがほりだされた場所や、かいづかの近くには、そのころの
人々の住んでいた家のあとが、土のなかにうずまって発見され
ます。そのような家のあとをみて、どんな家だったか、考えて



今みられるたてあなの家

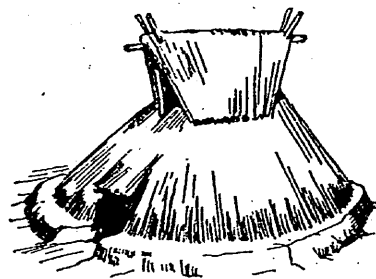
大むかしの人々にとっては、火を手にいれるのが、たいへんむずかしいことでした。地めんにあなをほって、ひくいやねをつけたのは、ただ、雨をふせぐためばかりではありません。風がふきこんでも、火がきえないように、わざと、こんなにやねの大きな家をつくっていたのだと思います。

日本の大むかしの人々は、はじめ、こんなそまつな「たてあな」の家に住んでいたのです。しかし、土をほってつくる家は、どうしても、しっけが多くて、住みごちがよくありません。それで人々は、なるべくこたかい丘の



たてあなの家のとす。まるいあなは、はしらのとす。

そこからはしらがたてられ
ている。やねはそのはしらの上に、木の枝や草などをかぶせてつくり、家のまんなかには、小石をしいてつくった、ろが用意してある。きつと、こんなぐあいだったのでしょう。



たてあなの家をそうぞうしてみると、こんなぐあいになります。



①②は、大むかし、日本の人々がきていたといわれるきものです。しかし、人々は、だんだん③④のようなきものをきるようになったといわれています。それは、そのころの「はにわ」から、そのかたちをそっくりして試みる事ができます。⑤⑥は、そのころの「はにわ」とよばれるにぎょうのようなものです。「はにわ」はむかしの古い大きなおはかのなかなどからほりだされることがあります。

上、や山のふもとのように、しっけのすくない土地をえらんで、すまいをつくることにしていました。

かんたんなはたけづくり

まえにお話ししたように、とりやけだものは、よくとれるときと、とれないときがあります。また、お天気がわるくて、思うようになりてかけられない日がつづくこともあります。それとおなじように、木のみや草のみも、ほしいときにいつでも手に入れることができるわけではありません。ですから、かりやりようだけでくらしをたてていた人々は、たべものがなくてこまりぬいたこともすくなくなかったことでしよう。

そこで、人々は、しだいに、自分のすまいの近くにかんたんなはたけをつくって、たべものを手にいれようと、くふうする

ようになりました。家のまわりに、あさく土をほつて、たねをまき、水をかけ、ざつそうを引きぬいて、草や木がそだち、みがるのをまつたのです。

はじめのうちは、ごくかんたんなはたけづくりだったので、女やこどもでも、らくにできるほどのしごとでした、ですから、男たちは、あいかわらず、かりやりようにでかけていたことでしょう。

しかし、しだいに、人間のかずがふえて、たべものがたりなくなる、こんどは男たちまで、はたけてたべものをつくるようになりました。それは、まえにもお話したように、はたけづくりのしごとがやりやすくて、そのうえ、たべものをまぢがいなく手にいれることができると考えたからです。

男たちは、まず、草に火をつけて、野山をやきはらってしまいます。すると、土がやわらかくなり、のこつたはいがこやしになります。そのような土地に、あわや、ひえや、まめなどをまけば、たいへんよくみのります。ところによつては、このような農業のやりかたをはじめた人々も多かったということです。しかし、そうなっても、人々は、まだまだ、かりやりようのくらしをやめたわけではありません。野山をやきはらつて作物をそだてることも、まだそれだけで人々のくらしがたつていくほど、大きなしごとにはなっていないからです。

ところで、かりをしたり、かんたんな
はたけづくりをしたりしてくらしている



これは、アメリカに住んでいるインディアンが、むかし、しせんにはえたこくもつをかりとっていたときのありさまです。

と、ひとつの場所に、たくさんの人があつまって、長いあいだ、住みつづけているわけにはいきません。その土地からとれるたべものを、しだいにたべつくしてしまふからです。そこで、人は、あちらこちらにわかれて、ばらばらに住むほうがよいということに気がついてきました。しかし、わかれて住んでみても、たべものにこまってくると、もつとよいところをさがして、うつりあるいていくのがふつうでした。



金ぞくの道具を使うようになって、人々の生活は、どんなふうにかわってきたでしょうか

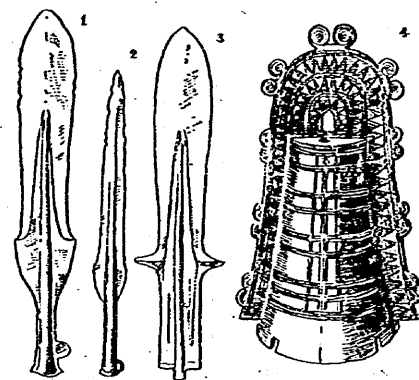
金ぞくの道具

日本の大むかしの人々が、長いあいだ、石の道具だけしか知らず、たいへんふべんなくらしをしていたとき、大陸から、新しい金ぞくの道具が、つたわってきました。それは、今から二〇〇〇年ぐらいまえのことだといわれています。

そのころ、大陸の人々はもちろんのこと、遠いヨーロッパの人々も、もうずっとまえから、石のかわりに、金ぞくて道具をつくっていたのです。

石の道具と金ぞくの道具とでは、たいへんなちがいがありま

す。今まで、石のほうでは切りにくくてこまつただけだものかわも、金どくのするといはものを使えば、かんたんに切りとることができる。それに、かねのほうは、かりやりようを



これは、日本のむかしの人の使っていた金どくの道具です。1と2は銅のはこ、3は銅のけん。4のつりがねのようなのは銅たくとよばれるものです。

するのにたいせつな、やじりやはりをつくるのにも、たいへんべんりです。ですから、金どくの道具を使うようになると、かりやりようもらくになり、えものが、まえよりもとやすくなつたにちがいありません。またはたけしごとをするにも、石のくわよりも

金どくのくわのほうで、ふかく土地をほりおこすことができて、たいそうらくになります。

そればかりでなく、金どくの道具は、石の道具とちがつて、思うとおりのかたちにこしらえることができるので、うまいくふうをすれば、今までにない新しい道具も、どしどしつくりだしていくことができます。

このようにべんりな金どくの道具が、今まで石の道具しか知らなかった大むかしの日本人のあいだに、つたわつてきたのでした。そして、たちまち、銅や青銅でつくつた道具、そればかりでなく鉄の道具までが、ほとんどいちどきに使われるようになりました。

いちど、この新しいべんりな道具が、人々のあいだにつたわ

ると、たべものも、手にはいりやすくなり、したがって、てすうも、かからなくなります。また、それだけ時間にもゆとりができて、その時間をもっとほかのしごとに使うことができます。こうして新しいべんりな道具を使うことを知った人々は、それを知らない人々よりも、もつとすすんだ、らくなくらしかたをするようになっていったのです。

銅銅たく 銅銅たくとよばれる青銅の道具は、いつたいなにに使われたのでしょうか。つりがねをたいらにしたようなものですが、たぶんおまつりのときなどに使った道具だったのだらうといわれています。大陸の人々も、これによく似た銅のかねを使っていた。それが、日本につたわったのだといわれています。

お米づくり

金どくの道具が、大陸からつたわってから、はたけづくりもたいへんすすんできました。作物のしゅるいもふえてきました。

そして、その新しい作物のなかに、お米がありました。お米をつくりはじめから、日本人のくらしは、たいそうかわつてくるのです。

今では、日本じゅうどここの土地にいても、農家の人々は、たいていお米づくりを、おもなしごとにしていきますが、このお米づくりは、もともと、南のあつい地方ではじまったものだといわれています。それが、大陸につたわり、そこから、日本につたわってきたのでした。

新しい金どくの道具をもつてきた人々は、このお米のつくricかたを、人々におしえました。それまで、かんたんなはたけをつくって、あわ・むぎ・まめなどがとれるのをたのしみにしていた人々は、こうして、田をつくり水をひいて、いねをそだて、



大むかしの人がお米をついているところです。この絵は、銅たぐにかいてあったものです。

お米をつくる新しい農業をはじめようになつたのです。

しかし、水田をつくるには、水をためておくいけ、水をひきいれるみぞなどをほるといふ大しごとをやら

なくてはなりません。ですから、たくさんの人々が、力をあわせてやらなければ、りっぱな田はつくれなかつたわけです。それに、田をつくるには、べんりな道具がひつようだったので、こんなとき、金どくの道具は、たいへん役にたつたのでした。

人々は、ひとつの土地に住みつかなければならなくなつた。お米づくりをはじめた人々は、まもなく、もうまゑのように、たべものをさがして、歩きまわることができないことに気がつ

きました。もし、田うえをしたただけで、ほうつておいて、ほかの土地にたべものをさがしにいったとしたら、どんなことがおこるでしょう。けだものが、田をあらしくるかもしれない。また、ほかの人がやつてきて、いつのまにか、みのつたお米をどつていつてしまふかもしれない。それに、手いれをしないと、せつかく、苦心しいねをうけても、よくみのらないでしょう。ですから、それをふ

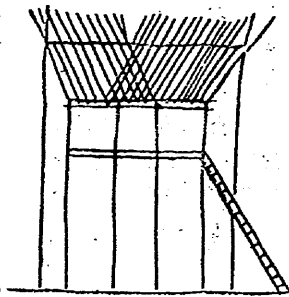


人々はひとつの土地に住みついて、はたけしごとをはじめます。

せぐためには、田の近くにすまいをつくって、田うえから、お米がみのるまで、こしをおちつけて、せわをしなければならなくなります。

人々は、このようにして、あちらこちらうつりあるくくらしをやめて、ひとつの土地に住みつくようになっていきました。水田をつくるには、水をひくのにつごうのよい土地がべんりです。それで、人々は、川ぞいの土地にうつり住むようになりました。しかし、あまり川ぞいのひくい土地では、大雨のときなど、よくこうずいがおこって、田もすまいも水びたしになつてしまいます。それで、はじめは、川ぞいの土地でも、こうずいなどにおそわれるきけんのすくない場所に、田やすまいをつくつたのでした。

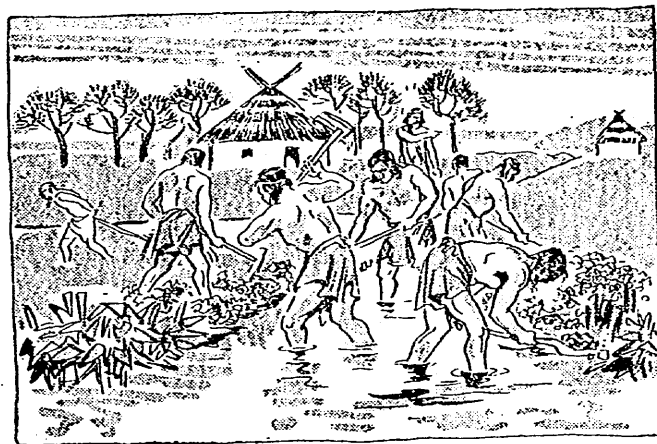
そのうち、お米づくりも、だんだんうまくなつてくると、一年じゆうたべるだけの米がとれるようになります。そこで、それをしまつておくくらが、あちらこちらにつくられました。そのくらは、たいせつなたべものをいれておくのですから、しつけが多いと、ものがくさりやすくてこまります。そのため、人々は、高いゆかをつけたくらをつくるようになりました。



これは、銅たぐにかかれて
いる高いゆかのあるく
らの絵です。

村ができる

お米づくりの農業をはじめた人々は、川ぞいの、水をひくのべんりな土地にうつって住みはじめました。しかし、人々は、



これは、大むかしの人々が、田に水をひくみぞをつくっているところです。

ここで、いろいろなむずかしいもんだいにつかりました。川ぞいの土地でも、長いあいだ、すこしも雨が降らないときには、水ぶそくでこまることがあります。また、そのはんたいに、大雨が降って、こうずいがおこり、田もすまいも水びたしになつてしまうこともあります。

そこで人々は、水ぶそくのときの用意に、ためいけをつくることをはじめました。しかし、ためいけをつくただけではまだたりません。ためいけや川から、どうして、自分の田へ水をもつてくればよいのでしょうか。いちいち、水がめて水をくんではおこんでくるのでは、てすうがかかってたまりません。それで人々は、みぞをつくって、ためいけや川から、自分の田へ水をひくことをはじめました。そして、それとともに、こうずいをふせぐため、川にていぼうをつくることをはじめました。

しかし、こういう大きなしごとは、とてもひとりやふたりの力でできるものではありません。たくさんの人々が力をあわせてしごをするのが、どうしてもひつようです。また、かしらになつて、けいかくをたて、さしずをする人がなくては、し



大むかしの日本の村のありさまを、こんなふうにもうごうして
みることもできるでしょう。

ごとがはかどりません。
こうして、お米つく
りの農業がさかんにな
るにつれて、しだいに
たくさんのお米があつま
りができるようになって
いきました。そして、
あちらこちらに、ぶら
くのようなものができ
あがりました。村は、
このようにしてはじま
ったのです。

村ができれば、そのうちに、村の人々をさしずするかしらも
きまります。こうして、人々は、ひとつの場所にたくさんの人
人があつまって、力をあわせてくらしていくことをおぼえたの
です。人々は、ひとりの人の力ではできないことでも、たすけ
あつてやりとげることができました。村には、たくさんの人々
がいたので、みぞをつくったり、ためいけをつくったり、てい
ぼうをきずいたりするような大きなしごとをするのにも、たい
へんべんりだったのです。そのおかげで、お米づくりもらくに
なり、作物のしゅうかくも、ずいぶんふえていきました。
それでも、はじめはまだ、ぶらくをつくって、いっしょに生
活するということを知らなかった人々もあつたでしょう。しか
し、てきにせめられたときなど、ぶらくをつくっているほうが

心づよいので、だんだんぶらくになかまいりました。また、ぶらくとぶらくとがいつしよになって、大きなぶらくができるようにもなっていました。

このように、お米をつくり始めるようになってから、世の中は、むかしとすっかりかわってきました。人々は、今までとはちがつて、ひとつの土地に住みついて、助けあつてくらすようになりました。

しかし、ぶらくをつくつて生活していると、ほかのぶらくからせめられることもありますし、ぶらくの人々のうちで、あらそいのおこることもあります。そのようなときに、人々のさしずをしててきをふせいだり、あらそいをおさめたりするのが、村のかしらのやくめでした。ですから、かしらになる人は、村

の人々のなかでも、たいてい年とつた、ちえのある人がえらばれたのです。

そのうちに、ぶらくがしだいに大きくなると、かしらのしごとまたいへんいそがしくなってきました。しかし、それとともに、かしらのいうことをきく人のかずも、どんどんふえてきます。そこで、大きなぶらくのかしらは、たくさんの人たちから、たいそううやまわれるようになっていきました。



教師のかたがたへ

社会科学習指導要領補説には、第三学年の主要経緯領域が、「他或社会の生活〔大昔の生活と比較して〕」と示されている。この期の児童は、全く文明のひらけない不自由な時代の人々の生活に、しばしば興味を示すものであることは、われわれの多く経験するところである。

この「大むかしの人々」は、人類や日本の文明のひらけない大昔の未開の生活およびわれわれの祖先の生活に取材して、現在の人間生活・社会生活に対する目をひらき、これについて知識や理解を廣め、かつ深めることを、その主要なねらいとしているが、あわせて、できる限り必要な資料をも提供しようとした。

しかし、ここにおさめられたものは、その意味からいっても、決して十分なものとはいえないかもしれない。故に教師は、実際にあたっては、できる限り、さし絵その他の内容をおぎなつて、指導に役立たせていただきたい。

またこの本の内容は、四年用として配本される「日本のむかしと今」を読むために必要な理解や知識をあたえるのにもきわめて役立つものが多い。したがって、その意味で、「日本のむかしと今」の序説をなすということもできる。ただ、前述のように、この本の内容が、第三学年の児童の興味に適應し、したがって役立つものが多いと考えられるため、三年にも用いることにしたのである。

その意味で、この二つの本は、三年・四年を問わず、児童の理解の程度に應じて、適宜に融通して、使用するように配慮していただければ幸いである。

K160.3-1-32

社会科 小学校第三学年用
大むかしの人々
Approved by Ministry of Education
(Date Sep. 6, 1949)

昭和二十三年十月三十日 翻刻発行
昭和二十四年十月二十日 修正印刷
昭和二十四年十二月十五日 修正発行
(昭和二十四年十月十五日 文部省検査済)

著 者 文 部 省

発 行 者 東京都北区堀船町一丁目八五七番地
東京書籍株式会社
代表者 長 得一

印 刷 者 東京都台東区二長町一番地
凸版印刷株式会社
代表者 山田三郎太

発 行 所 東京書籍株式会社

大むかしの人々 四折

